



撮影：西山芳一（表紙、並びに当ページ）

境橋

栃木県那須烏山市

関東地方随一の清流といわれる那珂川が錦繡に染まり始めた。那須烏山市を走る県道でこの川を渡るのが境橋だ。橋長一・二・五以、幅員六・一以の上路式RC橋。オープンスパンドレル（開腹式）という間隙のある側壁を擁するスタイルの三連アーチ橋だ。完成は一九三七年。それ以前の渡河は一八九七年に渡された舟橋に頼っていた。長さ約一一以、幅約二以の木船一〇艘を鎖で連結し、その上に梁を渡して板を敷き並べた橋だったという。その後、一九二〇年に洋式を模したトラスの木橋が架けられたが多発する洪水に耐えるべく一七年後に現橋が架設された。現在の橋は三代目ということになる。設計は関東大震災後に帝都復興局橋梁課長として隅田川の橋梁群をはじめ、かの名橋「聖橋」など数十橋を手掛けた橋梁設計の第一人者成瀬勝武による。同氏が著した土木の名著とされる『彈性橋梁』でも境橋の設計は多くのページ数を割いてその設計が紹介されていることから、当時のRCアーチ橋のなかでも模範となる橋梁であったことが伺える。特筆すべきは橋脚上で左右対称に設けられた

半円形のバルコニーだ。威風堂々とした佇まいを魅せながら優雅さも併せ持つ美橋は二〇〇七年に土木学会選奨土木遺産に認定されている。

三代目も完成から八〇余年を経て老朽化は否めない。それでも幾度となく補修がなされ現在に至るまで現役の橋として大切に使用れ続けている。木船を連ねた浮き橋から木製のトラス橋、そして現在のコンクリートアーチ橋。淡く色づき始めた紅葉に映える境橋の美景を前に一〇〇年を超える橋梁の来し方にしばし想像を巡らせた。



橋上のバルコニーからは那珂川県立自然公園の景勝を楽しむことができる。紅葉の季節のみならず新緑、冬景色と季節ごとの景観を眺め渡すことを計算に入れた設計なのだろう。バルコニーを擁するRC橋は国内では数橋しか現存しない貴重なものだ。